東日本大震災・避難者健康調査事業

看護師　直本　宏

平成 27 年 5 月 11 日～6 月 5 日にかけて、福島県いわき市に避難している浪江町民の健康調査事業を行いました。福島県では東日本大震災に伴う福島第一原発事故の影響で、住み慣れた土地を離れて避難生活をしている方が、まだまだたくさんいらっしゃいます（浪江町だけでも 2 万人以上）。日本赤十字社はそんな方々への中長期的支援として、震災後より継続して健康調査及び支援活動を行ってきました。

今回、私はいわき市で避難生活を送る浪江町民のお宅を訪問して、震災後の生活習慣や環境の変化、こころの変化などについての聞き取り調査を行うと共に、今までの避難生活の苦労について話を傾聴することで、こころのケアを実践してきました。多くの方は健康に大きな問題はなく、現在の生活について「仕方がない」とあきらめの言葉を口にしながらも、前向きな気持ちで新たな土地での生活を営んでいます。しかし、話を聴いているうちに「でもあの事故がなければ…」と涙を流される場面もあり、震災から 4 年以上経過した今でも、深い悲しみが続いていることを感じました。また、原発事故による放射線の影響はまだまだ長期間に及ぶことが予想されています。浪江町には住んでいた家や土地などが存在するにも関わらず、避難区域に指定されているため帰ることができず、今後帰れるのかどうかも分からずに、喪失感や不安な気持ちを抱えたままの方々も多くいらっしゃいます。

このように、福島県では東日本大震災の影響がまだまだ色濃く残っている現状があり、今後も地域や行政と協力しながら継続した支援を行っていく必要性を感じました。

町民と笑顔で会話する直本看護師

日赤なみえ保健所でのミーティングの様子